

中国单身女性調査 by Wu Shuping (吳淑平)
copyright © 2010 by Wu Shuping

This Japanese translated edition is published by arrangement with
Wu Shuping c/o Beijing GW Culture Communications Co., Ltd., Beijing
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

自序

六年前、「独身女性調査」という本を出版すると、比較的注目され、数種類の全国紙で相次いで取り上げられもし、ネット上のアクセス数も非常に多かった。けれども私自身にはどうにも意外でしかたなかった。それと言うのも、私の他の著作の方がこれよりかもしれませんが思っていたからだった。

そのため、外文出版社編集者の劉女史から、この本の英訳版を出版したい旨の話があった時には、私の他の著作を出版したらどうかと勧めたほどだった。でも内容や売れ行き動向などからだろうが、彼女はあくまでもこの本の出版にこだわった。

私には時として、純文学の方が本書のようなルポルタージュの類よりずっと価値があると思う傾向がある。

以前、ある新聞の「告白を読む」欄を担当していたため、そうした類の本が世に出るのは当然ではあったが、私の純文学への思い入れが強かったからだろうが、こうした仕事が時間とエネルギーのまったくの無駄遣いのように思われて仕方なかった。そのため二〇〇八年末に『親身になって』を出版した時には、序文で、今後は告白物には手を染めないとまで記した。それにも関わらず、なんの因果か再度、本書を書くことになってしまった。しかし、おそらくこの先はもう決してこのような内容の

ものを書くことはないだろう。

六年後の現在、原稿の見直し作業を進めてみると、汗顔の至りである。私の足腰が定まっておらず、その結果、調査が綿密、周到とは思われない何人かの人物についての文章を思い切って削除することにした。そのため分量が半分ほどになってしまい、あらためて未発表の新しい調査内容を加えることにした。調査範囲は北京、上海、広州、深圳といった大都市から成都、厦門、杭州、岳陽など中都市にまで及んでいる。しかも現代人は同じ都市に住み着こうとしない人が増えてきていて、どこの都市の人という枠組みで括ることが難しいケースにもよくぶつかったことから、本書を『中国独身女性調査』とした。

個人のプライバシーに関わる本音や告白に切り込んで、まとめた文章を読んだ多くの人は必ずと言っていいほど、次のような質問をする。「これは事実なのか」と。その答えはもちろん「その通り」である。ただ断っておかなければならないことがある。それは当事者の口頭での物言いと、文章にした表現とでは完全には一致していないということである。口語表現をそのまま文章にはできないからだが、しかしその内容は細部に至るまで、すべて語られた事実そのものである。

その他にも説明を要することがある。文章中に記された対象者の年齢はすべてインタビュー当時であり、現在の年齢はそれぞれ一歳から六歳、加えなければならぬ。またあらためて連絡の取れたインタビュー対象者は、現在もすべて独身であり、厳密に言えば、すべて未婚のままであった。どうやら「女性余り」の時代、結婚はなかなか難しい問題になっているようである。

以前、私を「心情専門家」と呼ぶメディアが少なくなかったが、それはあまり正しいとは言えない

だろう。なぜなら私は専門家ではなく、ごく普通のメディア人であり、作家であり、心情分析でも強いて言えば、研究者に過ぎない。仕事柄、多少は研究して、少々自分なりの捉え方を持っているに過ぎないだけである。

私が心理分析医でないことは、大いに強調しておかなければならないだろう。これまでに心理、心情に関する作品を発表したり出版するたびに、読者から心の悩みについての質問が数多く寄せられた。私はそれらの手紙には誠意をもってすべて返事を書いてきた。ただ私は占い師ではないので、読者の簡単な記述内容だけで十全な処方箋を書くことはできなかった。かりにそのようなことをすれば、無責任な行為であろうし、自分が善導師にでもなったような過信の結果にほかならないだろう。

対象者へのインタビュ―時、私は忠実な記録者に徹し、訴えかけてくる者の隠された事実を漏れなく記録することこそ私のやるべき仕事だった。彼女たちの話から屈折して見える現代中国社会の心情問題、心理問題、家庭問題、そして社会問題については見識豊かな方々、あるいは後世の人びとの研究にゆだねるしかない。

これをもって序としたい。

呉淑平

独りじゃダメなの——中国女性26人の言い分
目次

自序

あのころに戻りたい

私が北^{こく}まで来た理由

私は金魚

一文字が不倫の始まり

北京のカリスマエステティシャン

女は子どもを産む機械だなんて！

母も私も結局 “女”

結婚したい！

留学はしたけれど

羊はオオカミが好き

シングルマザー

僧侶と恋に落ちて

おとぎ話とは違ってた

3

13

26

37

47

52

57

68

75

81

87

97

118

141

欲張る女

二股の果て

この気持ち、どうすればいいの？

街は輝いているけれど

求む！ 休日の恋人

金持ちなんて最低！

男好きの女

結婚はしたけれど

心はひとつ

天国の恋人

第三者って誰？

はつきりさせてよ

ゲームなのか夢なのか

本書の翻訳について

コラム

- ① 近年の離婚事情とその後 43
- ② 中国の出稼ぎ事情 63
- ③ 中国の住宅事情 115
- ④ 中国における通信手段の変遷について 136
- ⑤ 中国人の収入について 176
- ⑥ 近年の結婚事情 218
- ⑦ 中国の学校事情・大学生の就職事情 265

独りじゃダメなの——中国女性26人の言い分

あのころに戻りたい

取材場所…北京市朝陽区のレストラン

取材相手…王萌萌
ワンモモモ

年 齢…二十八歳

略 歴…大卒、教育関係会社経営、章子怡に酷似。

一

彼とはブログで知り合い、QQ「チャット用のソフトウェア―訳者注」で愛しあうようになり、初めて会って燃え上がり、終生の愛を誓い合った。「永遠（とわ）の幸せ約束して、あなたのために書いた歌、彼もそつと涙を浮かべ、私もあなたとの約束忘れない、今ではもつと愛しているの」というあの『約束』の歌詞とそっくりそのまま。

ブログが流行り出した頃だった。彼も始めたばかりで、自分の気持ちや思いを書き込んでいた。当時、私は辛い愛を終わらせたばかりで、もう愛を育てることなんてできないと思っていて、男という

ものに壁をつくって、私に言い寄ってくる男たちに心が動かされることなどなかった。彼は彼で、行き違いの愛を終わらせたばかりで、結婚することもないだろうと思っていたらしい。

ところが以心伝心、それとも前世からの因縁なのか、私は彼のブログが気に入り、毎日必ずチェックして、じっくり読むようになった。でも最初の頃は読むだけで、書き込みなどしなかった。

やがて彼が真面目で、善良で、親しいで、責任感があり、頭が良いことに気がつき、どれも私が求めているものばかりだった。でもそんな私の思いは心の奥に抑え込んでしまっていた。

一年半が過ぎたある日、彼の文章に感動し、いてもたってもいらなくなってQQの番号を書き込んだ。それまでの彼は十人以上のQQを無視していたけれど、私だけは何となく感じるものがあったらしく、QQに加えたらしい。

パソコンを開けたとき、私を加えたことに気づいて、どうしても気持ちを抑えられずに「本当なの？」と訊いたら「そうだよ」と返ってきた。

パソコンでお互いの画像を見ながら、二人は前世からの知り合いだったかのように、とてもじっくりいっついていて、たぶんこれが一目惚れっていうものだったのかもしれない。チャットをしていて、これほど楽しく、気持ちを通じ合ったことなどなかった。

互いにQQに登録し、頭から離れない存在になっていった。私は遅寝遅起き、彼は早寝早起き、でも彼の出勤前にチャットしたくて朝からパソコンを開けて待った。彼も、帰宅するなりパソコンを開けて私を待った。互いに仕事を片付けると急いで帰宅し、QQで相手の画像を見つめ合うようになっていった。

八月十八日の日記にこう書いた。まだ会ったことのない人にこんなに恋いこがれてしまっていて、片時も彼のが忘れられないのは、神様が引き会わせてくれたのかもしれない。彼こそ私の未来の夫、だって正直で、善良で、向上心があつて、私は彼の心を読み取れるから、二人が一緒になれば、私はきつと彼を幸福にしてあげられる……彼以外の人はもう考えられない。

彼の方もずっと想い続けていたらしい。愛の経験を積んできた大人だけに、会ったこともない人にしてこんなな夢中になるのか、本当に神様がいて、神様の思し召しなのだろうか、と。

私はQQに二度、携帯電話の番号を送った。彼は口では番号を覚えたと言っていたけれど、実は覚えていなかった。必ず彼から連絡が入るはずと思っていたものだから、知らない番号から電話がかかってくるたびにドキドキしたけれど、いつも失望させられ、メールも入らなかった。

あとで彼に聞いたら、「幻影」という言葉を耳にするたびに怖くなり、衝動的になるまい、私を傷つけない、自分で自分を抑えなければ、と考えて直接連絡できる手段は使わないと決めて、私の番号を覚えなかった。互いに失望することなく、美しい思い出として残せたほうがいいと思ったのだそうだ。

でも、あふれる気持ちは次第にどうしようもなくなっていく。まるで洪水が堤防を決壊させるように。彼は暇さえあればQQで私を待ち、私に返事を書いていたという。

あるとき兄嫁に話したら、それは本当の愛だから、広州へ会いに行けばいいと言われた。彼にそのことを伝えると、はつきりとは言わなかったけれど、ためらっていたみたいだった。

それから間もなく、兄といっしょに実家へ行く用事ができ、日程も決まった出発六時間前になって、

このことを彼に伝えた。あなたが望むならすぐ広州に飛行機で行き、四時間だけだけれど時間が取れると。でも彼は、あまりにも慌ただしすぎる、二人の愛がずっと続くなら慌てることはないと言ってきた。

そのときは会えなくてちよつぷりがっかりしたけれど、彼の言うとおり、二人の愛がずっと続くなから、急ぐこともないと自分を納得させた。

私の実家は江西省上饒市（江西省上饒市）の小さな町で、家にパソコンはなく、町にはネットカフェもなかった。そのためいつもの連絡手段が使えず、その数日間というものの電話やメールを心待ちにしていたけれど、彼は自制していたらしい。私はしょっちゅう彼に抱かれて眠っている夢を見ていた。

故郷では友達や親戚と会って数日間、過ごしたけれど、彼のこと忘れられるのは一時でしかなかった。一週間近くなると、とうとう我慢できなくなり、親戚の人たちと大きな町へ食事に出かけたとき、友達の家に行くと言っていると嘘をついて、ホテルに泊まった。ネットカフェに行くため、彼は毎日、QQに私へのメッセージを残してくれていて、とても興奮したし、嬉しかった。彼のメッセージを見るためだけにホテル代三百元を使ってしまったけれど。

北京に戻るや、真っ先にパソコンを開いた。夢中でキーを打つ二人の会話は支離滅裂だったと思う。しばしの「別れ」が感情を高ぶらせてしまっていたから。

それまで私は一人の人をそこまで思ったことがなかった。何をしても彼のことが頭から離れず、彼から言われれば、すぐに何でもしようと思った。他の人から頼まれても無視しただろうけれど。彼も私を信じて何でも話してくれた。私たちは一緒に事業を起こす計画を立てた。その頃にはすでに普

通の友達や恋人ではなく、血のつながった肉親のような奇妙な感覚になっていた。

ウエブのサイトで姓名判断を試みたら、不思議なことに、前世では家族だったし、現世では夫婦になる運命があると出た。生年月日占いでも二人の相性はぴったりで、私は文句なしにそれを信じた。彼へのこうした感覚を現実の知識だけで説明するのは難しかったから。

二

ひと月ほど経ったある日、仕事中に携帯電話の電池が切れてしまった。仕事を終えて帰宅し、いつも通りパソコンを開けた。どんなに忙しくても八時半には家にいるようにしていた。パソコンを立ち上げながら携帯電話の充電もした。そしてQQに入るや、今夜九時に北京空港に着くから迎えに来てほしいというメッセージが目飛び込んできた。携帯にも入れているはずと想って開いて見るや、十八通も入っていた。一通だけ知らない番号があり、開けてみると、それも彼からで、内容はQQと同じだった。私は舞い上がりながら慌てて着替えをして、車を飛ばした。家から首都空港まで車で三十分ほどなので、スムーズに走れば彼の到着と同じくらいに着けると思い、車を思いっきり飛ばした。空港に着いても彼からの電話がなく、私は十二番ゲートで待っているとメールを出した。彼からは荷物のピックアップ待ちとの返信があった。

それから数分後、私がまたメールを出すと、今行くとの返事。そしてついに十二番ゲートから彼が姿を現した。写真で見ると同じだった。ずっと前からの恋人のようで、初対面だなんて思えなかつ

近年の結婚事情

中国の婚姻事情を述べるにあたり、中国の法定結婚年齢、計画出産政策について説明しておきたい。中国では、一九五〇年の婚姻法による法定結婚年齢は、男性が二〇歳、女性が一八歳だったが、一九八〇年から一人っ子政策の実施と共に、婚姻法の法定結婚年齢も男性が二二歳、女性が二〇歳に引き上げられた。二〇一六年に新しい婚姻法が発表されたが、法定結婚年齢は一九八〇年の規定のままである。これは世界の国々の中で、もっとも高い法定結婚年齢である。ちなみに、日本の法定結婚年齢は男性が一八歳、女性が一六歳からである。中国は法定結婚年齢を他国より平均二〜四歳引き上げ、一人っ子政策とセットで推進することで、人口の膨張に歯止めをかけようとしたことは言うまでもない。その後、少子高齢化現象が進み、二〇一五年末に一人っ子政策を廃止した。

さて、中国の今の婚姻事情を知るには、「華人婚姻恋愛のバロメーター」と言われる百合網（ネットワーク）婚姻恋愛研究院が主導する「中国人婚姻恋愛状況調査報告」は、有力な参考資料の一つだと思われる。百合網は中国の婚姻恋愛をサポートするネットワークの先駆的存在であり、毎年、国の研究機関や組織と連携し、中国人の婚姻恋愛状況の調査を共同で行っている。二〇〇七〜二〇一二年までは中国婦女連合会の婚姻家庭研究会及び民政部の中国社会協会婚姻紹介業界委員会と、二〇一三年は中国人口福利基金会と、二〇一四年は婚姻恋愛研究の専門家・オピニオンリーダー・メディアの専門家からなる「百人推薦団」と、二〇一五年は北京大学社会調査研究センターと共同で調査を行い、現在まで九年に渡って調査を進めてきた。そして、調査項目は年度ごと

の婚姻実情を反映し、多少重複するところもあるが、多方面に涉つて展開しているのが特徴である。そこで百合網婚恋研究院の各年度の調査報告の要点を紹介しよう。

初めての調査となった二〇〇七年の報告では、七七%の女性は結婚相手の人柄を最も重要視し、経済力を重視する人は三%に過ぎなかった。八一%の人は婚姻が個人のことであり、親に干渉されたら説得に尽力すると答えている。また、六〇%の人は結婚相手の学歴を気にしないと答えていた。ところがリーマンショックの影響か、二〇〇八年の後半になると一変し、結婚相手選びの基準は経済条件（持家、貯金など）が人柄と並ぶようになった。

二〇〇九年にはネットを通じて結婚相手を探すのが流行り、「裸婚（地味婚）」、「隠婚（既婚者が結婚事実を隠し、未婚を装うこと）」、「獵婚（婚活）」などの言葉が世に出た。「剩男、剩女」（適齢期を過ぎた男女、広州市の統計では二〇〇九年

男は三五歳、女は二八歳である注1）に共通してみられる問題は、恋愛未経験（約五〇%の人が恋愛経験一回以下）、見合いの途中放棄（六割強の人）、親か友人が結婚相手を代わりに募集し、周りの人の婚姻や恋愛の不幸が伝染すると考える「不幸伝染病」（約一〇%、特に女性は一二・四%）などがある。

二〇一〇年では、九二・八%の女性は結婚相手の安定的な収入を必須条件と考え、七〇%の女性は持家のある人と結婚したいと回答している。また、五〇%の男性も持家は結婚の必須条件と見ている。理想の職業は、男は公務員、女は教師と見た。農民工（出稼ぎ労働者）が都市部に大量に流入したことにより、農村部にいる若い世代は婚姻の危機に直面し、農民を結婚相手に選ぶ人はごく少数で、女性が〇・七%、男性が三・三%のみだった。

二〇一一年は両極に分かれる傾向が現れ、地味婚か、選ぶ基準を下げずに待ち続けるかのどちら

かになっていった。「閃婚（電撃婚）」、「閃離（スピード離婚）」もよくみられる現象となった。三割強の女性は男性が結婚の費用を全額負担、もしくは男性の負担を多くすべきで、結婚後の住宅も男性が購入すべきだと考えていた。また五七％の女性は自活する力を持つより玉の輿に乗った方がいいと考えていた。

二〇一二年に入ると、親しい異性がいるのに結婚したくない人が増えていき、三三・二％の独身男女は自ら「恐婚（結婚が怖い）」と認め、その理由として主に男性は「家がない、家族を養えない、結婚費用が払えない」、女性は「不倫が蔓延、DVが怖い」であった。結婚後財産管理、家計分担の点では、五三・二％の女性は妻が財政権を握るべきだと思っているが、男性は一七・九％しかそう思っていないかった。

二〇一三年は幸福度調査を行い、自分の家庭に対し、一九・八％の人はとても幸せで、四一・三％は比較的幸せだと感じているらしい。学歴が高

いほど家庭に対する幸福感が強く、修士課程卒以上の人は七〇・四％、短大卒以下の人は四九・四％が幸せだとしていた。幸せな家庭を作るために男性の三五・八％は同じ生活習慣を重視する（女性は二六％）に対し、女性の五五・一％は経済条件や生活レベルを重視する（男性は三四・七％）傾向があった。また調査報告によると、二〇一三年時点で男性三八・二％、女性四一・一％が三〇歳の結婚を晩婚と認識している。そして、適齢期を過ぎた女性の年齢については、女性の六六・六％が三〇〜三五歳だと考えているのに対して、男性の八一・五％は三〇歳過ぎだと考え、そのうち六〇・九％は二六〜三〇歳を結婚最終ラインと考えている。一方、適齢期を過ぎた男性の年齢については、女性の七〇・三％が三五〜四〇歳だと考えている。男性は六七・六％が三〇〜三五歳だと考えていた。

二〇一四年の調査報告では、男性六二・一％、女性八〇・〇％の人が「生活範囲が狭く、ぴった

本書の翻訳について

本書が底本とした原著名は『中国单身女性調査』（二〇一〇年九月、新華出版社）である。

『中国单身女性調査』は、著者の呉淑平が中国の独身女性たちと直接会ったり、あるいはメールなどの通信手段を用いて、彼女たちの生活実態や想いを聞き取り、それをまとめたものである。なお呉淑平は、当事者たちの語り口がそのまま生かされているとは言い難いが、すべて彼女たちが語った内容であり、事実であることを「自序」で強調している。

登場する女性は二十六人で、著者が深圳に定住している関係からか、聞き取り調査をした地域は十人が深圳で、次いで北京六人、広州二人、上海一人となっていて、残りはメール等での聞き取りである。

これら二十六人中、半数以上が現在、中国で「剩女（シヨンニユ）」と呼ばれる都市型、高学歴、高収入で、なお独身でいる女性たちと言っているだろう。この「剩女」という言葉、日本では「売れ残り女」などと訳される場合もあるようだが、本書でおわかりのように、個人的な理由によって「結婚しない」明確な意志を持つ女性から「結婚をためらう」、あるいは「結婚できない」女性までさま

ざまである。

〈翻訳について〉

訳書名が原著書名と大きく異なっていることをお断りしておく。

また原著では、二十六人のうち十六人について、女性の出自や生活の状況、その環境、さらには当人の人物印象等々がそれぞれの冒頭に記されている。

さらに二十六人全員について、各文末にすべて「情感透視と分析」欄が設けられ、女性たちの独白に対する著者の見解が述べられている。

これらは原著では重要な役割を担っていると思われるが、日本の読者には必要ないと判断し、すべて翻訳から外した（この点は著者の諒解を得ている）。

本文中の日本語訳では、逐語訳となっていない部分や、段落なども原文通りではない箇所があることをお断りしておく。

翻訳するにあたって、メンバーである鈴木大樹、代珂、牛耕耘、都馬ナブチ、土屋肇枝、鷺巣益美、宮入いずみ、南雲智がそれぞれ分担して作業を進めた。以下に各人の分担部分を原題（活字の関係で簡体字表記ではない）と日本語題を併記して示しておく。

鈴木大樹 「人生若只如初見」「あのころに戻りたい」

「北漂女子」「私が北(ここ)まで来た理由」

「我是魚伍里的魚」「私は金魚」

代珂
「一個錯別字引發的私情」「一文字が不倫の始まり」

「北京辣妹子」「北京のカリスマエステティシャン」

「上海未婚媽媽」「女は子どもを産む機械だなんて!」

「單親女孩」「母も私も結局、女」

牛 耕耘
「漂亮結婚狂」「結婚したい!」

「海歸紅顏」「留學はしたけれど」

「羊愛上狼」「羊はオオカミが好き」

「單身媽媽」「シングルマザー」

都馬ナブチ
「有一種愛叫化緣」「僧侶と恋に落ちて」

「我的愛情沒有童話」「おとぎ話とは違ってた」

「欲望女人」「欲張る女」

宮人いずみ
「跟兩個男人同居的日子」「二股の果て」

「沒有歸宿的愛情」「この気持ち、どうすればいいの?」

「浮華城市」「街は輝いているけれど」

「尋找假日情人」「求む! 休日の恋人」

南雲 智
「自序」「自序」

「逃離豪門」(「金持ちなんて最低!」)

「性別女、愛好男」(「男好きの女」)

土屋肇枝 「傷心少婦」(「結婚はしたけれど」)

「同心而離居、憂傷以終老」(「心はひとつ」)

鷺巣益美 「天堂情人」(「天国の恋人」)

「誰は第三者?」(「第三者って誰?」)

「遍地曖昧」(「はつきりさせてよ」)

「一場遊戯一場夢」(「ゲームなのか夢なのか」)

翻訳終了後、土屋、鷺巣、宮人が全訳文をとりまとめ、訳文チェックを行い、宮人が全体の統一作業をおこなった。南雲は統一作業が完了した全訳文に目を通し、一部に手を入れた。

コラムは本書を理解するのに多少なりとも役立てばとの思いから訳者らが加えたもので、原著にはない。コラム執筆者と執筆項目は以下の通りである。

鈴木大樹 「中国の学校事情・大学生の就職事情」

代珂 「中国における通信手段の変遷について」

都馬ナブチ 「近年の離婚事情とその後」 「近年の結婚事情」

土屋肇枝 「中国人の収入について」

鷺巢益美 「中国の住宅事情」

宮入いずみ 「中国の出稼ぎ事情」

なおコラムの最終的な検討、文体統一などは土屋、鷺巢、宮入が担当した。

本書は土屋、鷺巢、宮入三氏の尽力によつて、ようやく陽の目を見ることになった。私だけの力では刊行はまだまだ先のことになったはずである。この場を借りて三氏には深く感謝する。

最後になりましたが、いつものこととはいえ、あっさり本書の刊行をお許しくださった論創社の森下紀夫社長にはお礼の言葉もありません。

また本書の編集担当者松永裕衣子氏には忍の一字を強いることになったうえ、いろいろお世話になり、ありがとうございました。

二〇一六年十月二十九日

南雲 智

† 訳者

南雲 智 (なぐも・さとる)

1947年生。東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学。大妻女子大学教授。主な研究分野は中国近現代文学、文化。

宮入いづみ (みやいり・いづみ)

1962年生。東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程中途退学。明治学院大学、中央大学ほか非常勤講師。主な研究分野は中国近現代文学。

鷺巣益美 (わしず・ますみ)

1964年生。東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学。明治学院大学、中央大学、慶應義塾大学ほか非常勤講師。主な研究分野は中国近現代文学。

土屋肇枝 (つちや・としえ)

1964年生。東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学。慶應義塾大学、中央大学ほか非常勤講師。主な研究分野は中国近現代文学。

都馬ナブチ (とば・なぶち)

1965年生。東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学。拓殖大学非常勤講師。主な研究分野はモンゴル文学、文化。

鈴木大樹 (すずき・ひろき)

1984年生。首都大学東京大学院博士課程。天津外国語大学求索荣誉学院日本語教師。主な研究分野は中国近現代文学、文化。

代 珂 (だい・か)

1985年生。首都大学東京大学院博士課程修了。博士(文学)。首都大学東京人文社会系助教。主な研究分野は中国近現代メディア文化、植民地メディア文化論。

牛 耕耘 (ぎゅう・こううん)

1986年生。首都大学東京大学院博士課程。主な研究分野は中国近現代文学。

↑ 著者

呉淑平（ウー・シューピン）

中国作家協会会員。福建省詔安生まれ。現在は深圳市に住む。かつて深圳新聞グループの編集と記者、雑誌『鳳凰生活』の主筆を務めた。著書は20冊余、一部は欧米や日本で翻訳、出版される。中国青年文学賞、第8回深圳青年文学賞を受賞。主な作品に長編小説『商道門徒1, 2』『連鎖風雲』『商情水滸』のほか『中国单身女性調査』『Single in the city』などがある。

独りじゃダメなの—中国女性26人の言い分

2017年3月10日 初版第1刷印刷

2017年3月20日 初版第1刷発行

著者 呉淑平

監・訳 南雲智

訳者 宮入いずみ・鷺巣益美・土屋肇枝ほか

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／野村 浩

組版／フレックスアート

印刷・製本／中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1588-6 ©2017 Printed in Japan